

視 点 関連領域から家政系大学のスタッフとなって 18

建築学から人間生活学へ

八木澤 壯一

はじめに

2000年4月、東京の都心、神田錦町の東京電機大学から隣町一ツ橋の共立女子大に移籍した。専門分野も工学部建築学科から家政学部生活美術学科建築専攻と基本的には変化はない。まずはこれまでの研究の領域と方法、それに社会とのつながりを含めて自分史的にたどってみたい。

研究と実践の併行

東京都立大学工学部建築工学科での特別研究(卒論)は建築史である。埼玉県の秩父に明治初期にできた大宮学校という洋館建築の復原研究である。建物の実測、残された資料、特に建設資材帳を基にしたの推論だ。退官後東京家政学院大学に移られた桐敷真次郎先生から指導をうけた。大学院での指導教授も退官後、共立女子大学に移られた長倉康彦先生である。修士論文では、公共施設の施設基準を中心とする規模設定のメカニズムを追いかけた。博士課程のテーマは、施設の経営計画と建築計画の関連の解明であった。投資計画、コストプランニング、使われ方からの視点であった。

院生の間は、昼は研究、夜は設計という二重生活だった。研究室としての仕事と個人としての活動が交差する。建築学会の学校建築委員会の調査や雑誌論文の

作成と、個人テーマの掘下げが錯綜する。江東区や目黒区の学校や個人の住宅の実施設計を、OB諸氏を集めての夜間研究室事務所のマネージを努める。日本建築学会のアイデアコンペを同僚の院生で応募する。研究テーマの近辺のテーマで、幸い全国一等に入賞した。友達の住宅設計などの設計作業が重なってしまう。週刊誌「サンデー毎日」で住宅作品の紹介もあり、建築計画の研究者としては課題解明の現場にいられた感じが今でも懐かしい。

集落や都心の解析

電機大学に赴任してからは、これに建築教育と社会的な活動が加わった。研究領域も広がり、研究方法も多様化した。日本の大学教育は数の面で大半を負っているのが私立である。そこでは多い学生数、少ないスタッフ、劣悪な研究環境である。多様な学生を相手にする卒論体制を編み出すこと、外部の研究指導を呼びこむシステムづくり、千代田区神田を生かす研究環境の造成につとめた。

一つは、専門分野に閉じこもらないことである。計画研究の領域本来の立場からしても、当然のことであるが、私の場合には卒論で建築歴史を大学院では建築経済の分野に踏み込んでいた背景を持っていた。一つが伝統的な集落・建築の調査である。卒論生の旅行も兼ねてと、出身地の新潟に出向く。そこでの建築づくりにも携わっていた。味方村の3校を統合した「味方小学校」(1975竣工)や巻町の分離統廃合計画に基づく「巻東中学校」(1983竣工)などである。

原発用地の隣にある五か濱集落のサーベイを建築歴史の研究室と共同で始めた。これが越後出雲崎妻入街区研究に発展していった。地元住民有志の発案にボランティアとしての参加がスタートである。明治期の4kmに及ぶ1,000棟の妻入町屋、町おこし運動の一環を担っての行動になる。木造建築学校と呼び、民家実測に生活調査、電機大学を中心に目白女子短期大学、新潟大、都立大、東大、芸大、地元高田工業高校まで



Souichi YAGISAWA 共立女子大学家政学部教授

著者紹介〔略歴〕1937年新潟県巻町生まれ。1961年東京都立大学工学部建築工学科卒業。1966年同大学院博士課程満期退学。1966年より東京電機大学工学部建築学科で専任講師、助教授をへて、1982年教授。2000年名誉教授。2000年より共立女子大学家政学部生活美術学科、大学院家政学研究科人間生活学専攻教授、現在にいたる。工学博士。一級建築士。〔受賞〕1963年「自然公園に建つ国民宿舎」で日本建築学会設計競技全国一等入賞。1992年「火葬場を中心とする葬祭施設に関する一連の研究」で日本建築学会賞(論文)受賞。〔連絡先〕〒101-8433 東京都千代田区一ツ橋2-2-1(勤務先)。

も巻き込んだ。良寛出家の寺に寝泊りし多いときには70人を越す活動になった。NHKのテレビニュースでも放映された。その後観光資源財団の調査対象として『荒海や佐渡によこたふ天河』（日本ナショナルトラスト、1991）の報告書として纏められる。

東京でも足元の研究発掘に努める。成果の一例が都心研究と目白文化村調査である。国道246の青山通りの変遷、千代田の土地利用構造の変化、大正期の住宅開発とその変化を、多くの学生と歩き回ることによって蓄積した。結果は『都心の土地と建物 東京の解析』（東京電機大学出版局・日生財団刊行助成図書、1987）『目白文化村』（日本経済評論社、1991）として刊行されている。

建築の計画から企画へ

計画研究の中で、住宅性能総合評価システム開発研究が発端で、その評価者の判断の基礎がなにかを追い求めることと、学校建築研究の背景がドッキングして住教育研究に携わることになる。この研究を本格的にしたのが内田祥哉、鈴木成文、巽和夫、各氏の勧めと住宅総合研究所の援助にある。私と田中恒子、延藤安弘が指名されてのスタートである。そこに岸本、山崎、中野、曲田、吉村が加わっての展開で、『住教育』（ドメス出版、1982）として世に問うた。

大学院の時からテーマである、経営・運営計画を建築計画に取込んで行こうとするものである。学位論文のテーマが火葬場に移行したこともあり宿泊施設にこだわることなく広げてみた。建築するかどうかも含めての問題となり建築企画というタイトルに変わっていった。

新建築学体系の22巻『建築企画』（彰国社、1982）で学校建築や火葬場も含めて論じた。この研究は日本建築学会の建築経済委員会、建築企画小委員会・プログラミング小委員会の活動を軸に展開する。『建築企画論』（技報堂、1987）や『ソフト化時代の建築企画』（海文堂、1994）の出版へと繋がっていった。

人の死をめぐる建築

火葬場建築研究は、そのニーズが設計に携わったことと、施設管理者の教育に関与したことによる。いわ

ゆる建築計画研究の極めて素直な取り組みであった。火葬場の優れて豊かな特異性と特殊性が、建築計画学を超えて建築史学、都市計画学、建築経済学の領域を包含する、まさに建築学そのものを展開できると確信するようになった。

研究の発端となった故郷の巻町、岩室村ほか組合立火葬場「妙有院」（1968竣工、87増築）をはじめとして「酒田市葬祭場」（1976竣工）「栃本市斎場」（1978竣工）「京都中央斎場」（1980竣工）を研究結果の実践として手掛けた。

研究の成果は、学位論文「火葬場及び関連葬祭施設の建築計画的な研究」（1982、都立大）として取りまとめた。一般社会への還元として『火葬場』（大明堂、1983）をはじめとして『東京江戸学事典』（三省堂、1987）、『墓からの自由』（社会評論社、1991）、『葬送文化論』（古今書院、1993）、『葬斎場・納骨堂』（建築資料研究社、1994）、『斎場計画』（表現社、1994）、『江戸東京学への招待—2』（NHKブックス、1996）などがある。

近年の成果としては、基本構想から携わった香川県三木町の火葬場「しずかの里」（1999竣工）と『建築設計資料集成』（総合版 丸善、2001）で冠婚葬祭施設を担当した。

建築学から人間生活学へ

共立女子大では「人間生活研究室」に配属されている。大学院博士課程の専攻名である。火葬場研究が人の死に関わる空間研究に広がっている。人間らしい看取りの場としてのホスピスから一連のけじめとしての儀式場、生きた証を追悼する空間までが、その対象になっている。まさに「人間生活」そのもので、しかも建築に深い繋がりがあがる。被服や食物の分野の人たちとの共同研究も更に進めていく積もりである。

担当する講義も学科を越えて「住まいと人間」「高齢者論」「福祉デザイン論」と広がってきた。建築づくりの視点から更に生活づくりの見直しも兼ねて、今年ホームヘルパー2級の介護研修を体験した。高齢者、障害者の生活をヘルプすることが環境づくりの基本に通ずることになる。これからも研究と実践が続くことになろう。